

原著：秋田大学医短紀要10(2)：132-138, 2002

## 臨地実習における「食事の援助」の実施状況と教育に関する検討

長谷部 真木子 石 井 範 子 佐々木 真紀子

### 要 旨

この調査は、臨地実習において毎日のように患者の食事場面に遭遇している本学の学生の「食事の援助」の実施状況を分析し、学内学習との関連を検討したものである。その結果、臨地実習において学内学習を活用できた学生は84.1%であった。活用できた内容は約7割が『食事中の食物を口に運ぶ場面での援助法に関わる事項』であった。3割がそれ以外の『食事の準備や後始末に関わる事項』であった。一方、実施状況では、食事の援助項目で「毎回実施した」が50%以下の項目は7項目あり、『食事の準備や後始末に関わる事項』が多かった。実施できなかった理由としては「気づかなかった」や「機会がなかった」が多かった。食事の援助に対して看護者の関心が希薄になっているという報告を踏まえ、「食事の援助」に対してもっと看護介入できる場面や機会を意図的に学内演習や臨地実習で設けてゆく必要があると示唆された。

### はじめに

食事は人にとって、生命の維持、健康の維持・増進、疾病の回復、等の為に栄養補給をし、更に生活の中の楽しみの一つでもある<sup>1) 2) 3)</sup>。療養中の患者は疾病や環境条件により、食事の意義である栄養補給や心理的満足が得られない場合があり、看護者はそれらを満たすように援助する必要がある<sup>4)</sup>。看護技術は大きく「生活援助技術」「診療に伴う援助技術」に類別され、「食事の援助」技術は「生活援助技術」の中の1項目である。食事の意義からも「食事の援助」技術は重要な看護技術である。しかし、先行研究<sup>5) 6)</sup>では看護者は「食事の援助」の中で食事指導等、病態に関する援助行動の実行頻度

は高いが、食生活において極日常的に必要な食前の準備等、日常的な場面での実行頻度が低い傾向がみられると報告している。本学の学生も「食事の援助」として、日常的な場面では単に配膳を実施しているだけに見受けられ、必要な「食事の援助」を実施できているのか懸念された。桑野<sup>7)</sup>は「知識として理解しているだけでは技術を使うことはできない」と述べており、学生が実施できてこそ技術を使ったことになり、看護技術が身につくと考える。看護者の「食事の援助」能力形成には「教育」と「食事におけるライフスタイル」も関与していると言われるが<sup>5) 6)</sup>、「食事の援助」において確実に技術を習得するための教育方法上の課題を明確にするこ

秋田大学医療技術短期大学部  
看護学科

Key Words: 食事の援助  
臨地実習  
教育  
基礎看護技術

とを目的に、臨地実習での実施状況を調査し、学内学習との関連を検討した。なお、本研究では「食事の援助」とは、準備から食後まで、食事に関わる一連の行為への援助とした。

## 研究方法

- (1) 対象：A 大学医療技術短期大学部看護学科3年生で研究の主旨を説明し了承が得られた72名。
- (2) 時期：全ての臨地実習が終了した平成12年12月。
- (3) 方法：調査用紙を用い無記名、一斉回答方式で実施した。学内学習の臨地実習における活用状況は「充分生かせた」「まあまあ生かせた」「あまり生かसेなかった」の3肢からの選択とした。学内学習を「生かすことができた内容」と「生かすことができなかった内容」については自由記述とした。次に坂入<sup>8)</sup>、桜井<sup>4)</sup>が挙げた項目をもとに、独自で作成した17の援助項目について臨地実習での実施状況、および実施できなかった理由を調査した。17項目からなる援助項目の実施状況は「毎回実施した」「時々実施した」「実施しなかった」の3肢からの選択とした。更に実施できなかった場合は「機会がなかった」「気がつかなかった」「行

おうとしたが、できなかった」「その他」の4肢から選択し、「行おうとしたが、できなかった」と「その他」を選択した場合は理由や状況を自由記述するとした。

- (4) 分析方法：学内学習の臨地実習における活用状況は単純集計した。活用内容は記述された事項を研究者間で検討し内容別に分類し、記述件数を求めた。援助の実施状況については単純集計した。記述された事項については研究者間で検討し内容別に分類し、記述件数を求めた。

## 結果

72名に調査票を配布し、71名から回収でき、69名(95.8%)の有効回答が得られた。

### 1. 学内学習の臨地実習における活用状況

学内で学習したことを臨地実習に「充分生かせた」16名(23.2%)、「まあまあ生かせた」42名(60.9%)、「あまり生かせなかった」11名(15.9%)であった(図1)。

「臨地実習で生かすことのできた学内学習の事項」の記述件数は110件であった。その内容を分類すると①『食事中的食物を口に運ぶ場面での援助方法に関わる事項』と②『食事の準備や後始末等、食物を口に運ぶ場面以外での援助方法に関わる事項』になった(表1)。①の内容は「食物を口に運ぶ場合の援助方法」18件、

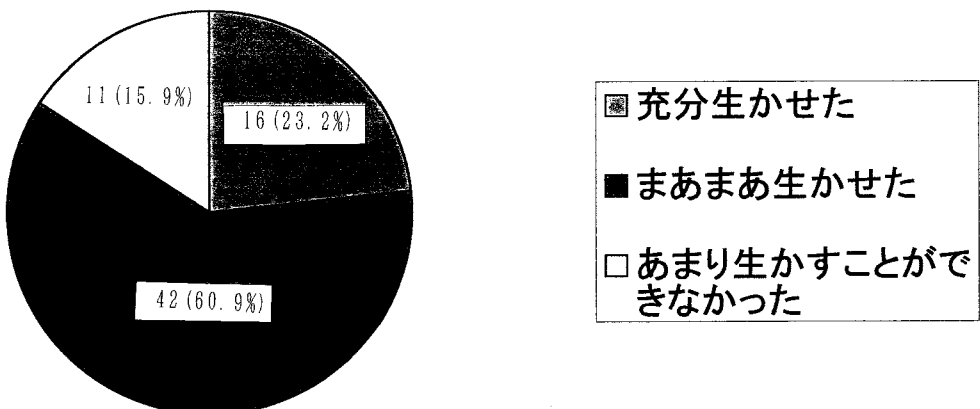


図1 学内学習の臨地実習における活用状況

(32) 長谷部真木子／臨地実習における「食事の援助」の実施状況と教育に関する検討

表1 臨地実習で生かすことができた学内学習の事項

①食物を口に運ぶ場面での援助方法に関わる事項		82件 (74.5%)
具 体 的 内 容	・ 食物を口に運ぶ場合の援助方法	18
	・ 食物を運ぶ速さに注意する	17
	・ 食物を運ぶ順序、バランスに配慮する	12
	・ 一口量に配慮する	8
	・ 声かけやコミュニケーションが大切	7
	・ 食事摂取時の体位に配慮する	7
	・ 食事中は良く観察し援助する	7
	・ スプーンの角度、口への運び方	5
	・ その他	1
	②食物を口に運ぶ場面以外での援助方法に関わる事項	
具 体 的 内 容	・ 食事環境の整備及び準備	9
	・ 摂取量も含めて食後の観察	3
	・ 食欲への配慮、食への関心	2
	・ その他	14

表2 臨地実習で生かすことができなかった学内学習の事項

①機会が無いという理由を述べた事項		18件 (66.6%)
具 体 的 内 容	・ 機会が無かった	13
	・ 環境整備以外は機会が無かった	1
	・ スプーンやフォークを用いた援助は機会が無かった	1
	・ その他	3
②その他の事項		9件 (33.3%)
具 体 的 内 容	・ 実際の患者と相違がありわからない	3
	・ 痴呆の人への援助	1
	・ 口に運ぶ速さがわからない	1
	・ その他	4

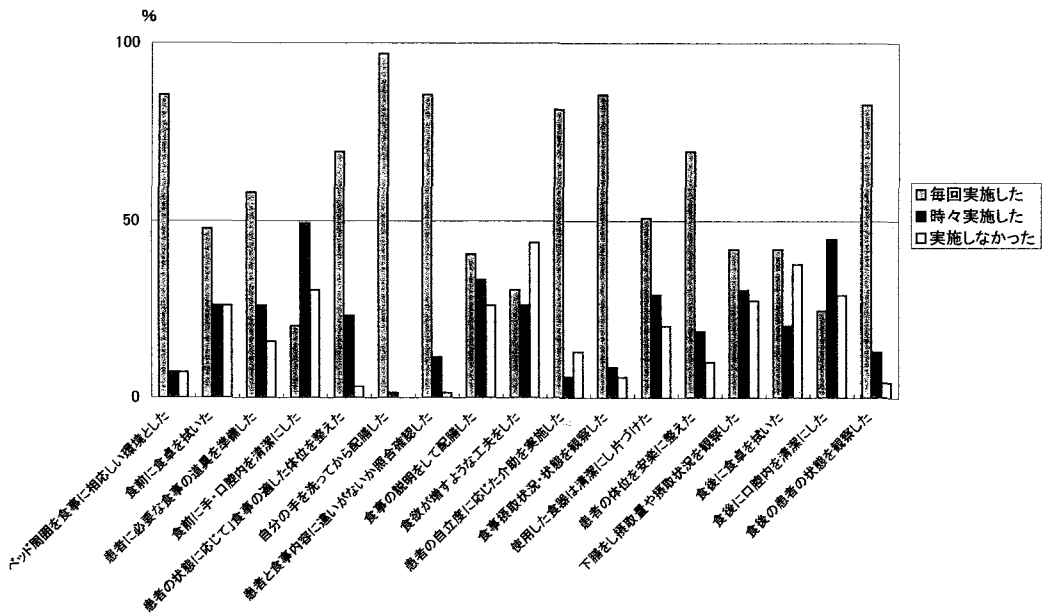


図2 食事援助項目の実施状況

「食物を運ぶ速さに配慮する」17件、「食物を運ぶ順序、バランスに配慮する」12件、「一口量に配慮する」8件、「声掛けやコミュニケーションが大切」7件、「食事摂取時の体位に配慮する」7件、「食事中は良く観察し援助する」7件等で合計82件(74.5%)であった。②の内容は「食事環境の整備および準備」9件、「摂取量も含めて食後の観察」3件等で合計28件(25.5%)であった。

「臨地実習で」生かすことができなかった学内学習の事項」の記述件数は27件であった。その内容を分類すると①『機会がないという理由を述べた事項』と②『その他の事項』になった(表2)。①の内容は「具体的な記述は無いが、機会がなかった」というものが13件、「スプーンやフォークを用いた援助は機会がなかった」1件、等合計18件(33.3%)であった。

## 2. 臨地実習における「食事の援助」実施状況(図2)

臨地実習の援助実施項目で「毎回実行した」が最も多い項目は『自分の手を洗って配膳した』94.4%、次いで『ベッド周囲を食事に

に相応しい環境として』83.1%であった。

『患者と食事内容に違いが無いか照確認した』『食事摂取状況・状態を観察した』『食後の患者の状態を観察した』が80%の実施状況であった。一方、17項目中「毎回実施した」が50%以下の項目は『食事前に食卓を拭いた』『食事前に手・口腔内を清潔にした』『食事の説明をして配膳した』『食欲を増すような工夫をした(見た目や温度)』『下膳をし摂取量や摂取状況を観察した』『食後に食卓を拭いた』『食後の口腔内を清潔にした』の7項目であった。特に『食欲が増すような工夫をした』は一度も実施しなかったが42.3%と最も多かった。

上記7項目の実施できなかった理由をみると、「気づかなかった」という理由を多く挙げている項目は『食事前に手・口腔内を清潔にした』『食事の説明をして配膳した』『食後に食卓を拭いた』であった。

「機会がなかった」という理由を多く挙げている項目は『食欲を増す様な工夫をした』『下

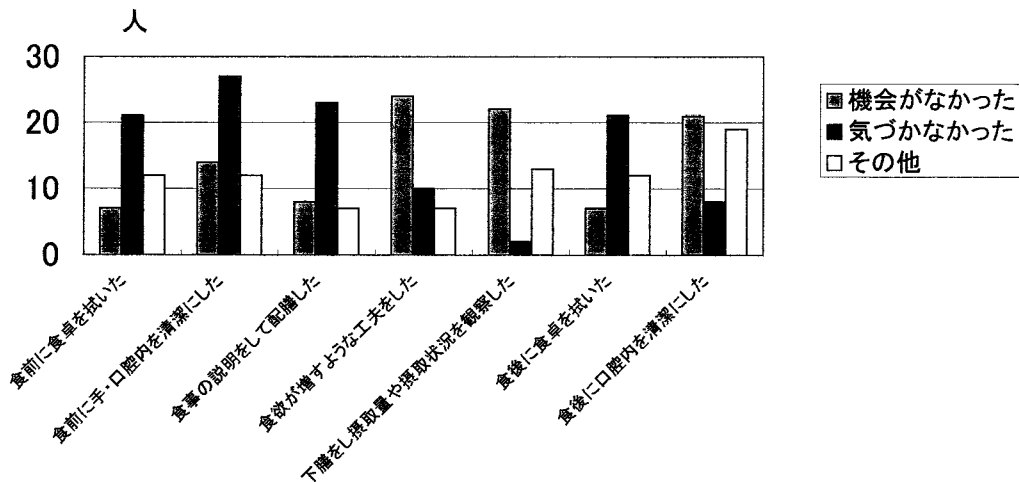


図3 「毎回実施」が50%以下の項目とその理由別人数

膳をし摂取量や摂取状況を観察した』『食事後の口腔内を清潔にした』であった(図3)。

その他自由記述には「患者に断られた」「食事を準備するのは自分達ではないので手が加えられなかった」等がみられた。

## 考 察

病院における臨地実習では殆どの学生が毎日のように患者の食事場面に遭遇している。その様な中で学生の「食事の援助」状況を調査してみた。「食事の援助」項目の中には患者の状況に応じて毎回実施する必要のない場合もある。しかし、『食事前の手・口腔内の清潔』『食事前の食卓を拭く』『食事後の食卓を拭く』『食事の説明をして配膳する』は重要な援助であるにもかかわらず、気づかなかったという理由で「毎回実施」は低かった。これらの項目については、行為の重要性を認識できるように学内学習の工夫や、実習指導の場面で気づかせる様な関わりを持つことが大切であることが示唆された。また、これらの項目は食物を口に運ぶ場面以外での援助項目である。臨地実習においての学内学習の活用状況を見ても、食物を口に運ぶ場面での援助方法は学内学習を活用できていたが、それ以外の食事に関する事項の活用はわずかで

あった。「食事の援助」は食物を口に運ぶことだけが援助ではないことを充分に認識できる様にする必要がある。その学内学習の工夫として、以前はプリンとお茶だけの簡易メニューでの演習であったが、メニューの数を増やす、実際の病院食を用いる等、食事として提供する内容とした。この学内演習に切り替えたことで援助技術の手順を学ぶだけではなく、入院患者の食生活という視点も加えることができた<sup>9)</sup>。メニューを増やし病院食に近づけた方法での学内演習を体験した学生の、臨地実習における「食事の援助」の実施状況については、今後の調査で明らかにしていきたい。

次に『食後の口腔内の清潔』は「機会が無かった」とした理由が多く、「口腔内の清潔は患者に断られた」という記述もあり、その要因として患者の遠慮や生活習慣の違いも影響したのではないかと考えられる。しかし、一度も実施しなかった学生も多く、積極的に機会を設けたり気づけるよう働きかける必要があると考える。また、「食後の口腔内の清潔」の必要性を更に認識させる為に、「口腔内の清潔」と「食事の援助」の項目を一緒に学内演習するなど、各項目を連携させた学内演習の計画も必要と考える。『食欲を増すような工夫をした(見た目や温

度)』については「機会がなかった」の理由が最も多く、「食事を準備するのは自分達ではないので手が増えられなかった」という記述もあり、給食部で準備された食事に手を加えることに制約感を持っていると推測される。食欲を増進させるために見た目、食べ易さ、食物の温度に対する配慮等は実施可能であることに、気づかせる様働きかける必要がある。中西<sup>10)</sup>は「患者の食事に対する看護婦の関心が希薄になってきているように思われる」と述べている。また、池内<sup>11)</sup>は「栄養課が患者個人の食事に細かく対応できるようになったり、患者のセルフケアに委ねることが多かたりして、看護の食事に対しての介入意識が低くなってきている。よって看護基礎教育課程で食事への看護介入を高めるような学習の機会を意識的に設けてゆく必要がある」と述べている。つまり、学生ばかりではなく臨床での「食事の援助」に対する認識も再検討する必要があることを示唆しており、今回の調査結果を臨床指導者とも共有し臨地実習で意図的に関わってゆく必要があると考える。

## 結 論

今回の調査から多くの学生が「食事の援助」を「食物を口に運ぶ場面での援助」として捉えて実施していることが分かった。このことから、基礎看護教育において「食事の援助」に対し、もっと看護介入できる場面や機会を意図的に学内演習や臨地実習で設けてゆく必要が示唆された。

## おわりに

今回の実施状況調査において「機会がなかった」とした理由を挙げた学生は、患者の状況を適切に判断した結果「機会が無かった」としたかは明確にならなかった。今後は状況も併せて

分析することが必要と考える。

本論文の要旨は第11回日本看護教育学会学術集会において報告した。

## 引用文献

- 1) 岡部聡子 (1982) 食事介助を必要とする患者の看護. 看護MOOK 1:131-137.
- 2) 氏家幸子編 (2000) 基礎看護技術:326.
- 3) 林公子 (1998) 栄養と食事. 基礎看護学2 基礎看護技術:279.
- 4) 桜井美代子 (1999) 食事における心理的援助, 情意領域の看護技術ケースに学ぶころのケア:90.
- 5) 尾岸恵三子, 足立己幸 (1990) 患者の食生活援助への看護婦の意識と看護婦の食生活との関係. 日本看護科学会誌10(1): 8-23.
- 6) 岡本富士子, 岩永美由紀 (2001) 入院患者の食事環境に関するケアの実態調査. 日本看護学会第32回看護総合:172-174.
- 7) 桑野タイ子 (2000) 看護技術の「技」をどう伝えるか. 看護技術46(2):120-124.
- 8) 坂入久美子 (1997) 食事. 看護実践の科学6増刊号:5-15.
- 9) 長谷部真木子, 工藤由紀子, 野村誠子他 (2000) 「食事介助」の演習において病院食を用いた効果. 秋田大学医療技術短期大学部紀要8(2):132-138.
- 10) 中西綾子 (1996) 絶食患者のQOLを考えた看護の対応. 看護実践の科学12(1):34-38.
- 11) 池内桂子, 仲野智津子, 黒田公子他 (1998) 新卒看護婦の自己評価からみた職場適応への縦断的研究(第1報) 日常生活援助と診療への協力技術に対する新卒看護婦および病院指導者の評価推移からみた看護基礎教育の検討. 看護展望123(4):488-496.

## Examination of the Situation of “Dietary Care” in Nursing Care Practice and Education

Makiko HASEBE Noriko ISHII Makiko SASAKI

Department of Nursing, College of Allied Medical Science, Akita University

This study was conducted to analyze what our students do on a daily basis in terms of "dietary care" as part of nursing care practice, as well as to examine its relationship to on-campus learning. The result showed that 84.1% of the students had been able to make use of their on-campus learning for dietary care in nursing care practice. Of them, approximately 70% "assisted the patient to move food from his hand to the mouth during a meal", while 30% "assisted in preparing the meal or cleaning up". As for the implementation rate of care, 50% or less of the 7 answers said they "assisted on every given opportunity". Of these, the most common activity was "preparing the meal or cleaning up". Common reasons for not assisting the patient included "Did not notice" and "Had no opportunity".

The study result revealed an increasing lack of interest among nurses, suggesting the urgent need to create opportunities for assisting the patient to eat as part of on-campus practice or nursing care practice.